

学究の徒、大垣さんを偲ぶ

朝倉 彰

私が大垣俊一さんと初めてお会いしたのは、大垣さんが京都大学大学院の博士課程の院生で瀬戸臨海実験所で研究をしておられた時で、私は九州大学大学院修士課程で天草臨海実験所の院生であった。その時、瀬戸実験所で海洋ベントスの談話会が開かれ、それで実験所を訪れたのであった。当時は天草も瀬戸も院生がたくさんいて、非常に賑やかに研究をしたり議論をしたりしていた時代であった。もともと両実験所は研究内容としてはよく似ている、いわば兄弟のような実験所で、しかしそれも考えてみればそのはず、京都大学の森下正明先生が一時、九州大学にいられて教鞭をとっておられたころのお弟子さんが、のちに天草臨海実験所の所長になられた菊池泰二先生であったわけで、言ってみれば九大は京大の流れを組んでいるという背景があったのである。

自分のようにもともとおっとりとした性格の人間には、瀬戸実験所の院生の口が立つことに驚いたものであり、時にその口は毒舌、辛辣に感じたものである。そういう中にあって、大垣さんはもの静かなジェントルマンであり、学問に対する真摯な姿勢が印象的であった。しかしまた同時にその信念は強いものを感じた。大垣さんが私のことをどう思われていたかは今となってはわからないが、私から見ると、話のテンポや内容はかなり波長が合っていたように思う。

当時は大垣さんは瀬戸実験所近くの磯でタマキビ類の生態を研究されていて、潮汐のリズムとタマキビ類の行動の関係を調べておられ、そのフィールドにも案内していただいたが、実に几帳面にデータをとっておられた。その後、小笠原諸島の父島や沖縄にも行かれ、タマキビ類の分布調査などをされていた。そして結局、そこから出発して生涯を磯の貝類を中心としたマクロベントスの生態の研究に捧げることになるわけであるが、いかにも大垣さんらしい一途な生き方である。

博士号を取られてからは、一時、神奈川県湯河原町で高校の先生をされていたことがある。私は、大学までは神奈川県におり、湯河原町のとなりの真鶴町にある横浜国立大学附属真鶴臨海実習施設で4年生の卒論の研究をしていたので、湯河原町とその高校がどういうところであるかは、知っていた。ありていに言ってかなり大変な高校であるのだが、そのころ大垣さんと何度かお話する機会があったが、案の定、相当に苦勞されていたようである。

大垣さんはもちろん研究者志望であったが、どういう理由かは聞かなかったが、ある時に「研究職に応募するのは止めた」と、おっしゃっていた。塾などで生計をたてながら独

自の道を進むということであった。当時からすでにこの業界は大変な就職難で競争率も 30～40 倍の時代であったが、自分も落ちても落ちても応募は続けていたが、ひたむきに純粋に学問の道を進んでいた大垣さんには、そうしたことさえも煩わしくなってしまったのかもしれない。

その後も学会などで時々顔を合わせたり、ときには電話で、ときには年賀状のやりとりの中で、情報を交換していたが、次第に学会で顔をお見かけすることが少なくなっていくように思う。しかしなんとという偶然か、今年の 1 月から私が大垣さんの地元である瀬戸実験所に勤務することになり、その時にご挨拶の e-mail を大垣さんに差し上げた。すると大垣さんからすぐに「春になって気候が良くなったら瀬戸実験所にお伺いします」というご返事をいただいた。私は旧交を温めることを楽しみにしていたのだが、その時まさか大垣さんが重篤な病気に罹られているとは夢にも思っていなかった。瀬戸実験所のスタッフの中には、頻繁に独り暮らしの大垣さんのところに行っていていろいろと手助けをされていた方もおられた、ということであったが、ご本人の意思によって病気のことは伏せられていたので、かなりの人たちが、訃報はまさに寝耳に水のことであった。大垣さんは几帳面な方であったので、健康面も十分気をつけておられたと思うのであるが、病というのは、なぜかそういう人にとりついてしまい、わからないものである。奇しくも私は今年の夏に天草臨海時代の同級生で良き友人を、大垣さんと同じ病気で失くしている。彼なども、学生時代はスポーツマンで健康そのものであり、その彼がなぜ病にかかってしまったのか、まったくわからない。

大垣さんの生涯というのは、まさに学究の徒というのにふさわしく、岩礁潮間帯の生物の研究に捧げられた。特に非常に長期間にわたるモニタリングを通しての、各種マクロベントスの変動を追い続けた研究の功績は高く評価されるであろうし、世界的にみても、同じ場所でこれだけ長く継続観察された例はまれである。

大垣さんとの研究談義はいつも楽しく、有意義なものであった。謹んで大垣さんに哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈りします。

(あさくら あきら・京都大学瀬戸臨海実験所)